

「子どもたちの夏(2)：高知市子ども会連合会のよさこい祭り」

Summer-Time of Children : Yosakoi Festival at the Children's
group union in Kochi city, Japan

岩井正浩

Masahiro IWAI

1. はじめに

2016年に第63回を開催した高知よさこい祭りは、日本各地のよさこい系祭りがイベント化する中で町内会・商店街が伝統的に祭りをリードしてきた。つまり年中行事の一環としての性格を維持してきている。^(注1)その中でも地域に軸足を置いた活動として特筆されるのが保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校、そして子ども会など子どもチームの参加である。

開催当初は町内会チームが主導的で、子どもチームは第27回まで0～2チーム程度の出場が続き、第28回(1981年)頃から微増、第30回大会から10チーム以上に増加していく。そして第47回(2000年)から20チームを越し、最大で26チームが出場を果たしている。子どもチームを常に牽引してきたのは各地区の子ども会チームと保育・幼稚園チームである。20回出場以上をみると、子ども会チームでは「高知市子ども会連合会」(38回)、「五台山校区子ども会」(25回)、「大津子ども会連合会」(30回)、「帯屋町筋ジュニア隊」(29回)、「すみれ子ども育成会」(28回)、「高須子ども会」(25回)、「安芸子ども会連合会“安芸童子”(安芸町、安芸市合併) (25回)である。また保育・幼稚園チームでは、「くるみ幼稚園」(38回)、「学校法人やまもも学園桜井幼稚園」(25回)、「同・芸術学園幼稚園」(25回)、「杉の子3園ちびっこ隊」(32回)、「みさと幼稚園」(36回)、「みかづき幼稚園」(34回)、「みかづき第二幼稚園」(35回)、である。新しいチームとして「香南市こどもよさこい連合会」(8回)、「あさひはっぴぽいす(あさひこどもよさこい踊り子隊)(7回)などが出場している。ただ「五台山校区子ども会」や「枝川土曜子供会」は出場を停止している。子どもチームの論考としては「子どもたちの夏：高知市南海中学校のよさこい祭り」で、子どもたちが地方車、鳴子、衣裳、振付など全てを製作して10年間踊り続けた活動を著している。本稿では校区や地域を基盤とした活動を展開してきている子ども会のよさこい祭りを対象として論じる。

2. 子どもの生活圏

社会的変動が子どもに大きな影響を与え始めたことに関しては、一番々瀬康子・他は『子

どもの生活圏』で「大人の配慮の重点」の〈創造的活動と〉で次のように論じている。

おとなにとって文化の伝達—教育の対象でありつつ、しかも子どもたちは、おとなをこえて未来に生きる存在である。(中略) 子どもたち自身の力で文化をつくり出し、展開してゆける場が十分に用意されなければならない。既製品の、セットになった遊具でなく、子どもたち自身の想像力をかき立て創造的な活動をひき出すような環境や設備が、重要なのである。

そして〈仲間づくり〉では、

子どもの生活圏の基本的な性格をチェックしてゆく上に重要なのは、それが子どもの周囲によい仲間をつくり出してゆくような方向をもっているかどうかという視点である。(一番ヶ瀬 1975 116)

子どもの生活圏確保の意義、本質については「終わりに」で以下のように論じている。

ひとことというならば「子ども市民の広場」確保ということである。子どもが自由に集まり、その生活の軸である「遊び」を通じて、子ども社会を形成するための広場の獲得。(中略) 子どもは、ただそこで生を営むだけではなく、過去の文化遺産を受けつぎ、それをもとに創造的活動を営むことができる存在、仲間をつくり、たくましく歴史をきりひらく存在でなければならない。(一番ヶ瀬 1975 232)そして、創造の世界、子どもの感性と結び付いたもの、美に対する感覚的成長におよぼす影響なども考慮した環境づくりをさらに注目したい。(一番ヶ瀬 1975 237) 子どもの基本的要求である遊びをどう認識するかということ、地域の生活のなかで考えること (一番ヶ瀬1975 240)

と提言している。また、わらべうた遊びについて、

この遊びのもつ単純な形式のなかに日本の民族文化のパターンが典型的に形象化されているのであろう。私たちはこの民族の遺産を受けつぎ創造するという課題を、日本文化のそれとして考えていかなければならないであろう。(一番ヶ瀬 1975 77)

として、わらべうたの持つ意義をとらえている。わらべうた遊びで重要なのが子ども集団である。子どものわらべうたは、集団が形成され、遊びの中で伝承・変容・創造されていく。わらべうたの伝承は、異年齢集団がもっとも効果的だが、現代の子ども集団は分断され、子どもが主体的に自己表現する、なかんづく身体表現する活動を確実に減少させてきている。子ども集団には、その中で喧嘩やいじめも存在し、過酷な状況を呈することもあった。しかし異年齢・タテ関係の子ども集団は、その限度と処理方法を自然と体得してきていた。動植物とのスキンシップや自然を思いやり、友達関係や人間の生命の尊さなども学習してきていた。それはまさに遊びから学んできたことであった。以前は、地域の教育力が子どもを育ててきた。子どもの成長にとってもっとも必要なこと、それは遊びであり、その遊びを成立させるのは子ども集団の形成であり、タテ関係＝異年齢集団の形成である。^(註2)

3. 高知市子ども会連合会の歴史

高知市子ども会連合会の上部組織としての全国子ども会連合会は、2013年4月1日に公益社団法人全国子ども会連合としてスタートした。

高知市子ども会連合会は1964年9月15日、高知市青少年対策推進本部・地区青少年対策協議会(現・小学校区青少年育成協議会)によって設立され、当時は23地区の行政区を基準として設けられていたが、1995年に小学校区制を採用し39校区に校区青少年育成協議会が組織された。(高知市子ども会連合会a 2004 67)

1966年には「第1回子ども会リーダー研修会」が開催され、ボランティアが子ども会を育成していくための「知識・技術」の指導者研修会が、高知市青少年対策推進本部主催で開催された。1967年6月には「かえるの学校」(高知市子ども会指導者養成研修会)がスタートした。

1967年11月には「第1回高知市クリスマス子どもまつり」、翌5月5日には「第1回高知市子どもまつり」が開催され、1975年10月4日に「高知市子ども会連合会」が結成されている。これに先だって同年9月10日に高知市子ども会連合会準備委員会は『高知市子ども会連合会についての趣意書』で、「今や子ども会は、ただ単に集まるだけの子ども会ではなく、その団体活動から生まれる集団性や、仲間づくりから生まれる人間性や社会性が学校教育、家庭教育に次いで社会教育面の活動として位置づけられる存在となり、地域社会に根ざした子ども会の必要性が注目されるに至りました。(中略)子ども会のより以上の発展のためには、各地区の子ども会の子どもと指導者と育成者の3本柱をつなぐ連合会が必要となりました。(後略)」(高知市子ども会連合会a 2004 71)と述べている。

4. 高知市子ども会連合会の活動

全国各地で子どもの健全な成長を意図してつくられた子ども会は、多彩な活動を展開してきた。高知県では2016年現在44校区で構成されている高知市子ども会連合会の活動が眼をひく。2004年度事業計画では、主催事業として5点が立てられている。

1. 子ども会育成・普及活動(通年)。
2. よさこいおどり(26回出場。8月)
3. 他市子ども会との交流(10月)。
4. 30周年記念事業(9~10月)
5. インリーダー研修(13回。2月)。(高知市子ども会連合会a 2004 30)

また、現在刊行されている冊子『子ども会』は次のように述べている。

子ども会は“子どもの集団”で、“遊びの集団”です。そしてそこに指導者と育成者が加わって成立します。子どもは遊びを通して社会性を身につけたり、いろいろな知識、技術、協調性などを学んで成長します。こうした子どもの遊びの特徴をとらえながら健全な仲間づくりをすすめ、心身の成長発達に大切な活動を促進し、助長していくのが子ども会で、その活動は学校や家庭での教育と共に、社会における欠くことのできない重要な社会教育活動です。

性格：①ある一定地域に住む、②年齢の違う子どもたちが小集団の班をつくり、③地域に住む全ての人々に見守られながら、④遊びを通して自主的に活動する、⑤学校とは別の組織で少年の健全育成を図る、⑥組織的・継続的活動をおこなう社会教育関係団体です。

会員：子ども会の会員は、同じ町内(校区)に住む小学生と中学生を対象にします。しかし、小学校の低学年と中学生では興味、関心、能力的に著しく差があり、活動の内容や中学生にはジュニアリーダーとしての役割をさせるなど、工夫が必要です。

指導者とジュニア・リーダー：指導者は、子どもたちと活動をともし、活動の相談や指導に直接当たります。子どもを正しく理解し、集団の基礎理論を踏まえて子どもの自主性をどう育てたらよいか、子どもの持つ個性をどのように生かしたらよいかを常に考え、子どもたちの相談相手になれる指導者です。さらに子ども会活動を進める上で重要な役割を持つのが高校生および中学生のリーダーです。この人たちをジュニア・リーダーと呼んでいます。子どもと大人の架け橋となり、中核的役割を持つこの若いリーダーは、会員と年が近いだけに、子どもたちの良き理解者であり、親しまれる存在です。単位子ども会には、せめて成人指導者が1名、ジュニア・リーダー1名は育ててほしいというのが願いです。

必要性：子どもは、乳児・幼児・少年・青年と、発達していくにしたがって自己中心から社会中心へと大きく輪を広げ成長していきます。その成長を助けているものの一つに子どもたちの「遊び」があります。(中略) 子どもたちは遊びを通して連帯性や協調性、責任感などを養い、人間関係を学んでいるのです。(後略)

そして「高知市子ども会連合会の活動」(8点)を掲げている。(⑤～⑦は略)

①校区、単位子ども会の連絡調整や行事の指導・協力。②指導者(成人、青年、年少)、育成者の養成と研修＝インリーダー研修会、育成者、指導者研修会。③子ども会の育成、普及活動、広報活動＝機関紙『子ども会ネットワーク』発行。④市規模でのイベント活動＝よさこいまつり、キャンプ、クリスマス中央大会。⑧協力事業＝こどもまつり(高知市)、みらい塾・高知(高知市教育委員会主催)、ジュニアリーダースクール(高知市教育委員会主催)(高知市子ども会連合会b 1984)

子ども会の活動は、家庭、学校と連携するとともに、さらに積極的に子どもの健全な発達を促進する活動をうたっている。その重要な部分は社会における〈学校外〉での活動であり、異年齢集団での活動である。地域における異年齢集団は青年・壮年・老人へと構成されてきた歴史を持っていた。現代社会ではこのような異年齢集団が存在できなくなりつつあり、子ども集団の崩壊化や様々な事件やコミュニティ弱体化を招いてきている。

5. 高知市子ども会連合会のよさこい祭り

1979年に初出場した高知市子ども会連合会は『創立30周年記念誌』で、昭和54年8月10日～11日よさこい祭りに参加する。

高知市子ども会連合会として初めてよさこい祭りに参加した。この時の子ども達の服装は体操服に赤帽、ジュニアは半パン、赤帽大人は半袖、白足袋姿である。市子連旗(岩井註：高知市子ども会連合会)を先頭に総勢250名の参加。そして現在に引き継がれ平成16年8月の第51回のよさこい鳴子踊り大会において、今や連続26回の参加となっている。(高知市子ども会連合会a 2014 74)

と記している。『平成28年度総会議案書』における「平成27年度総括」では、

恒例行事のよさこい鳴子踊りは、子どもたちの参加が若干少ないものの、元気な踊りで連続37回出場を果たしました。

とよさこいの総括をしている。2017年度は「よさこい鳴子踊り」予算として2016年度と同じく1,250,000円を計上している。(高知市子ども会連合会c 2016 3.8)

よさこいへの取組みチラシは、高知市子ども会連合会なるこ踊り実行委員会から、高知市内の3～6年生に配布された「市子連なるこ踊り子隊 募集」から開始している。それには募集人員120名、参加費12,000円(2015年度は120名、10,000円)、練習日は7月17、24、31、8月6、7日の合計5回(土・日の17～19時)、場所ははりま小学校グラウンドとし、注意事項として6点を挙げています。

1. 動きの激しい踊りなのでズボンをはき運動靴で来てください。
2. 長時間練習しますので、自分の飲み物をもって来てください。
3. 缶・ペットボトル・ゴミは持ち帰りましょう。
4. 植え込みや遊具、校舎裏などへの立ち入りはしないでください。
5. 汗拭き用のタオルも忘れないでね。
6. 駐車場はありませんのでご注意ください。(高知市子ども会連合会e 2015)

高知新聞では1983年の第30回大会から「出場チーム紹介」を開始した。「高知市子ども会連合会」が5回目の出場を果たしたこの年は、86チーム、1万人参加、ロックやディスコ調全盛の頃で、大型のトレーラー地方車も登場し、〈市民の祭り〉から〈県民の祭り〉へ、〈市民祭〉が〈祈願祭〉となった30周年記念祭でもあった。「出場チームの横顔」^(註3)には、高知市子ども会連合会について、

800名出場。市内の子ども会からチビっ子が赤い帽子、体操服で、みんなで参加、一生懸命踊るーを課題に出場チーム中第一の大事帯

と、紹介している。その後第34回大会からチームの出場人数は150名に制限されたが、800名出場は歴史的人数である。第31回大会からの「出場チームの横顔」に基づく記録は以下の通りである。

第31回=400人。「各地区からはみ出した子供を集める。人数に制限はなく、弁当代実費だけでだれでも参加できる。体操服で元気よく」。(1984年。6回目出場)

32回=300人。「踊りたい子供はだれでも参加できる。衣装は学校の体操服。移動は歩いて。踊りを通じて市内の子供たちがひとつにまとまる」。

34回=150人。「体操服のちびっこがお母さんと一緒に仲良くのびのびと踊る。ことしはタスキで華やかに。〈お友達も増やしたいな〉」。

当時の高知放送実況中継映像では、300人、赤帽、短パン、運動靴、各学校の体操服、で正調よさこい^(註4)を踊っている。地方車は乗用車の上に看板を付けた程度の簡単な装置である。参加費は弁当代の1,000円、子どもたちは今年は法被で踊りたいという気持ちが大きくなってきている。各団体に入れない子どもたちも赤帽・青帽をかぶって「高知市子ども会連合会」チームで正調よさこいを踊っている。ただ連合会と各子ども会に同時に入って踊れるようになるのが本来の形だと関係者の希望が紹介されていた。

35回=100人。「ことしは念願のそろいのTシャツができました。総合練習なしのぶっつけ本番ですが、元気さだったならだれにも負けない」。(1988年)

40回=150人。「市内各地から集まった子供中心のチーム。子供らしい活発な踊りを披露します。地方車も子供たちの手作り。汗を流しながら友情をはぐくみます」。(1993年)

42回=100人。「ことしも市内各地から子どもたちが集まりました。地方車はセーラームーンなど漫画の主人公の絵でいっぱい。大きな声を出して頑張るぞ」。

43回=150人。「ことしは踊りを一新。市内の小学生を中心に躍動感とリズム感を基調に協力。「子供たちの連帯」をテーマにきびきびした踊りを見せます。」(1996年)

高知放送実況中継映像では、高知市内にある130の子ども会の連合。オレンジ色の帽子、法被。よさこい鳴子踊りの旋律に、振付はラジオ体操、サッカー、バレーボールを取り入れている。連合会のため地域が広い。地区がバラバラなので合同練習はわずか3回。そのため「子ども会の」卒業生である中・高校生が指導している様子がうかがえる。

46回=150人。「キャッチフレーズは〈みがけ！魂〉。高知市内の3年生から6年生までの小学生の〈輝く魂〉をとくとご覧あれ！」。

オリジナルは、4/4拍子、♩=112で、タンタンタンタン|タ タッタッタ|、そして正調よさこいに引続く。振付は新しい要素を取り入れ、地方車は大型トラックでも乗用車でもない。そして地区がバラバラなので合同練習はわずか3回であった。

48回=150人。「正調よさこいを取り入れたことしは、太陽を表現したカーキ色の法被に注目。元気満点！笑顔でいきます」。

49回=150人。「じんばもばんばもノリノリ！ アップテンポな踊りと正調の踊りの2パターンを披露。楽しく元気に踊る子どもたちを見てほしい。」

50回=150人。「高知市内から多数の小学生が参加。50回目の今年は、例年以上に盛り上がっています。元気いっぱいの子どもたちをぜひ、応援してください！」。(2003年。25回目出場)

高知市子ども会連合化は、2004年に日本生命財団より助成を受けている。

ニッセイ財団第26回児童・少年健全育成助成団体として高知市子ども会連合会他5団体が決定し、(中略)高知市子ども会連合会に踊り衣装一式として金50万円の助成を受けた。この助成金を活用してよさこい踊りの法被を125着新調し、平成16年8月の第51回よさこい祭りに参加し披露した。(高知市子ども会連合会a 2004 86)

51回=150人。「今年で30周年を迎えた高知市子ども連合会。節目を迎え、法被もオレンジからブルーに変身。子どもたちの頑張りに応援をお願いします。」

体操服から出発した衣裳は、法被へそしてその色彩も進化を遂げてきたのである。

54回=150人。「よさこいへの熱い思いを胸に高知市内の小学生が集結。限られた予算と練習時間…。踊るたびに成長していく子どもたちの姿に、感動を覚えます」。

57回=150人。「〈汗出せ、声出せ、元気出せ！〉。年に1度の出会いを楽しみに高知市内の小学生がここに集う。オリジナルと正調の2曲を元気いっぱい笑顔いっぱい踊ります」。(2010年。32回目出場)

58回=130人。「そろいの法被は高知県の染めもの屋、振り付けは会員自らが手掛けるすべて手作りのよさこい。そんな〈ぬくもり〉を、踊りを通して皆さまにもお届けします」。

60回=120人。「高知市内の4～6年生が集まったチーム。第60回を記念して、姉妹都市の松江市と尾道市からも子どもたちが参加。躍動感いっぱいに正調を踊ります！」。(2013年。35回目出場)

61回=100人。「小学校3～6年生が正調とオリジナルの2種類に挑戦。家でも練習して振り付けを覚えました。声、汗、元気の全てを出し切って踊ります！」。

高知市子ども会連合会発行『市子連だより No. 2』は、第36回大会に出場した記録を掲載している。

今年も、61回を迎える鳴子踊りに参加しました。台風襲来で当日まで開催が危ぶまれました。市子連もどうしようかと随分悩みましたが、台風直撃は免れそうなので、夕方の追手筋テレビ中継より参加しました。130名の子ども達とスタッフ27名の参加です。子ども達は、天候など関係なくやる気満々で出発しました。追手筋、帯屋町筋、中央公園と笑顔で元気に踊ることが出来ました。少し物足りなさそうでしたが2日目に余韻を残して1日目は終わりました。2日目は、予定通り10時30分城西公園に集合して出発しました。県庁を皮切りに踊り始め続いて毎回練習している市役所前で心新たに踊りました。たくさんの方が応援してくださいました。その後、城東公園で美味しい弁当を食べた後、追手筋で踊り、花メダルをもらった子どももいて、ますます活気づき踊り抜きました。今年は待ち時間が少なく時間があつたので、予定になかった、はりまや橋競演場を踊ることが出来ました。メダルをもらった子ども、残念ながらもらえなかった子ども、それぞれに色々な経験を重ねて今年も良い思い出になったと思います。

そして高知市初月小学校4年生の西川愛夏さんは「よさこい祭りに参加して」という一文を語っている。

よさこいにさんかしてうれしかったことは、選ばれて一番前で踊れたことです。一番前だからお客さんとのきょりがちぢまってえがおが見れました。それから、追手筋で花メダルをかけてもらったとき初めてのメダルだったのでごくうれしかったです。来年もよさこいをおどりたいです。(高知市子ども会連合会d 2014 1)

また『市子連だより No. 5』では、第37回目の大会出場記録を掲載している。

毎年練習場所に市役所玄関前をお借りしていましたが、市役所が工事のためにお借りできず練習所を探していました。今年は、はりまや橋小学校のご厚意でグラウンドをお借りできることになりホッといたしました。7月12日より5回目の練習を終え、8月10日11日なるこ踊り本番を迎え、子どもたちは満面の笑顔で参加しました。当日は天候にも恵まれ張り切って踊ることが出来ました。今年参加した子どもたちは、練習日でも休憩と言ってもお茶を飲むとすぐに集まり練習をするほど熱心で、スタッフの方が困惑するほどでした。その甲斐あって本番でも素晴らしい踊りを見せてくれました。10日は県庁を皮切りに追手筋本部競演場、高知城、枳形、愛宕、そして念願のイオンに行くことができ大喜びでした。夕食を食べ1日目は解散しました。

2日目は、例年のようにバス移動で雪蹊寺に行き、その後、誠和園、福寿園と踊りました。午後は万々、梅の辻、菜園場、そして本部競演場で元気に踊り花メダルをもらって大喜びでした。その興奮のまま帯屋町、中央公園で踊り大満足でした。今年も暑さは厳しかったけれど皆元気で本当に楽しい思い出が出来ました。(高知市子ども会連合会e 2015 1)

63回=100人。「高知市内の小学3～6年生でつくるチーム。子どもたち全員が自らの名前を記入した地方車は必見！はじける笑顔、ぜひうちわであおいであげて」。(2016年。38回目出場)(写真4)

| | | | |
|-------|------------|--------------|-----------|
| 〔写真1〕 | 高知市子ども会連合会 | 養護老人ホーム福寿園演舞 | 2016年(巻末) |
| 〔写真2〕 | 同 | 地方車 | 2016年 |
| 〔写真3〕 | 同 | 万々競演場演舞 | 2016年 |
| 〔写真4〕 | 同 | 地方車への名前の寄せ書き | 2016年 |

6. 他地区子ども会の活動

高須地区で活動している高知市子ども会連合会の香川友理子氏によると、練習場所は市子連が「はりまや橋小学校校庭、介良、大津は学校で練習、高須は現在休止中の五台山に習いに行き立ち上げ。本番では幼稚園バス4台を借り上げて移動、2日目の移動は徒歩。高須の参加費は4回の弁当代6,000～8,000円。オリジナル曲は保護者の方が作曲、正調よさこい音源は高知商工会議所から借用し、アレンジしている。

〔楽譜I 武政英作作曲《よさこい鳴子踊り》〕(巻末)

曲や振り付けは、小学校3～6年生の子どもたちにとって、できたら新しく替えて欲しいと本音を語っているということであった。他地区子ども会(香南市、高知市介良、同大津、同高須)で行ったアンケートの結果は以下の通りである。

〔設問1〕音楽製作「①正調。②オリジナル。③正調とオリジナル併用。毎年更新かどうか」

〔香南市〕オリジナルで原則3年毎に更新。〔介良〕正調とオリジナル併用。〔大津〕オリジナル～この曲は4年目。同チームの過去に使っていた曲を再度採用、そろそろ変えたいです。〔高須〕オリジナル。2014年に専門家に依頼して変更。

〔設問2〕振付「①専門家に依頼。②独自に子どもたちで製作。毎年更新かどうか」

〔香南市〕専門家に依頼。原則3年毎に更新。〔介良〕専門家に依頼。〔大津〕専門家に依頼。毎年少しずつ変えているが、変更は指導者(大人)が考える。〔高須〕音楽と共に専門家に依頼して変更。

〔設問3〕衣装「①専門家に依頼。②独自に子どもたちで製作。毎年更新かどうか」

〔香南市〕専門家に依頼。原則5年毎に更新。〔介良〕専門家に依頼。〔大津〕保護者で知識ある人を中心に製作。修繕し毎年レンタル。そろそろ変えたい。〔高須〕専門家と子ども会のスタッフがデザインや生地を相談して製作。法被のために積立てをして5年くらいに一度変えたい。

〔設問4〕地方車製作「①専門家に依頼。②独自に子どもたちで製作。毎年更新かどうか」

〔香南市〕専門家に依頼。更新年は不明。〔介良〕実行委員会にて組立。同じフレームで2年に一度位下部の絵を変えている。〔大津〕保護者(スタッフ)が製作。トラックをレンタル。上積み部分はここ数年使い回し。

〔高須〕トラックに単管を積みPAを乗せた状態のものを業者から借入れ、スタッフと有志の保護者と一緒に2日間かけて飾り付け製作。

[設問5] 募集方法「①校区。②コミュニティ。③校区とコミュニティ」

[香南市] 香南市内の全小学校に募集。[介良] 校区。[大津] 校区、大津にゆかりあり。練習に通れば区外生徒も受け入れる。[高須] 高須小学校区内の小・中学生（中学生は応募が殆どなし）。

[設問6] 参加費用・助成金「実施しているとしたら何年から。その金額」

[香南市] 初回参加時から3年間県からの補助金にて。以降は市の補助金にて90万円。衣装等の更新などにより増額の年もあり。[介良] 11,000円、各団体、企業、町内会、自治会より助成金を頂いている。[大津] 10,000円（昨まで8,000円）。地区青少年協などから助成金あり。あとは寄付、地方車への広告、掲載をお願いしに回る。[高須] 昨年まで6,000円、2016年から8,000円。助成金なし、地域団体・企業・個人から寄付あり。

[設問7] 参加子どもの年齢・学年「開催年によって変更があるかどうか」

[香南市] 平成26年度までは全学年、上級生より120名程度（保護者も含む）。平成27年度は3年生以上、参加は4年生以上。平成28年度は4年生以上に。年々参加者が増えて来たため、保護者への募集は辞め小学生のみに。[介良] 1～6年生。[大津] 基本的に1～6年生。リーダーとして大津中学生。兄弟児で親の同伴あれば年長児も可。[高須] 移動バス定員の関係で120程度が限度のため一昨までは1年生からの応募があっても断っていたが昨年からは応募数が減ったので1年生も受付（高須小の生徒減少のため）

[設問8] 指導者「①専門家。②親。③中・高校生。④専門家、親、中・高校生」

[香南市] 専門家。[介良] 専門家。[大津] 親、中・高校生。[高須] 主に振付た専門家、専門家がない時は6年生が下級生の指導をする。

[設問9] よさこい参加の動機

[香南市] よさこい祭りを通じて子ども達に知識や経験を培う学習機能を持ってもらい、夏休みの良い思い出となるような交流イベントを企画したもの。[介良] 地域の子どもの希望によって。[大津] 今年30周年を迎え、指導者不足で危機もあったが子どもが喜ぶ姿見たさに頑張って続いている。[高須] 地元の子どもたちからの希望があったため。

[設問10] 練習「何回程度」。

[香南市] 15～20回程度。[介良] 8～9回。[大津] 夏休み開始日～8月8日まで毎日昼間に2時間。[高須] 7月末に6年生だけ練習を3日間、8月1日から全体練習を8日間。

[設問11] 子ども会活動との関連「子どもの反応」。

[香南市] 子ども会とは別事業で生涯学習課が主催の事業。練習時・祭り参加時しか参加者同士の関わりはないが、その間に校区・学年を越えての仲間作りが行われている。[介良] 子ども会とは全く別。[大津] 大津には別行動の団体として大津子ども会KPCがある。偶然にも指導者はほぼ同じであるが、子ども会とよさこいのどちらも指導するのは手が足りない。[高須] 高須子ども会はよさこい祭り参加のためだけの団体。

[設問12] 年間活動。

[香南市] 5月頃参加者募集、6月下旬練習開始、7月は練習と香南みなこい港まつりへの参加、8月は練習、よさこい祭り本祭参加、香南市田園祭への参加。[介良] 6月に参加申込受付。7月21日練習開始（8回）。8月9日地方車製作。[大津] 5月頃募集開始。保護者説明会、団結式を経て練習。10月頃まで地域の祭り、福祉施設などで踊る。[高須] よさこい祭り以外の活動はしていない。

アンケート結果からは、音楽はオリジナルと正調よさこい、振付と衣装は専門家に依頼、地方

車製作は専門家依頼、子ども会、実行委員会や保護者で製作。ただ子どもたちは音楽、振付、衣装などを常に新調したいという希望を持っている。これは高知よさこい祭りの出場チームが基本的に毎年全てを新調して出場しているということに触発されているためでもある。募集方法は校区、香南市は市内の全小学校、参加費用は助成金、補助金とともに1万円前後の費用を徴収している。ただ、この金額は企業やクラブチームと比較すると随分と安く、弁当代やバス移動などが主たる費用となっている。指導者は専門家が主だが大津は親や中高校生が担っている。子ども会との関連は、多くが別組織となっている。そしてこれらの子どもたちは、成長すると企業やクラブチームに入って新たに挑戦するケースが多い。

7. 「群れ」ることの意味（終わりにかえて）

子どもの生活圏は、われわれが子どもであった時代とは大きく様変わりしてきている。経済の高度成長期であった昭和30年代から、人口の都市集中化・地域の過疎化が進行し、自然破壊で動植物との出会いの減少、学歴社会の到来による受験体制の強化、車社会による遊び場の減少が子どもに現実として立ちはだかってきた。さらに高度情報化による一方的な情報の伝達と、文化の均質化（とくに東京文化）、受け身型文化、そしてテレビゲームなど、子どもにとっての客観的状况は悪化の速度を速めてきた。その結果、子ども集団の脆弱化、なかんづく異年齢によるタテ関係の崩壊が進行した。本来、子ども文化は受け身ではなく能動的であり、しかも即興的であった。その中で子ども会の活動とひと夏の体験となっているよさこい祭りへの参加は、身体表現を異年齢集団として共通体験として行っていることに大きな意義があった。

よさこい鳴子踊りへの参加は共通体験としての一種の「群れ」ることである。「群れ」ることに関し、芸能山城組の山城祥二は『群れ創り学』の中でドイツの例をあげ、

ドイツにはもともと青年団（若者組）の伝統が永くあったが、ワイマール体制下でそれらが一挙に崩壊して若者の群れる場が失われたという事実である。この青年層の不安感と不満とを吸い上げながら巧みに群れ創りを進めていったのがナチスの下部組織“ヒットラーユーゲント”だった。（山城祥二 1981 24）

とし、「祭り組織の解体と祭りのおとろえ」について、

祭組織の中心部にも当たる若者組が姿を消してしまうにつれて、地域共同体である祭組織全体もまた全面的解体の道をたどることになってしまった。（中略）祭組織は、人間のつくる群れの中でも最もすぐれた構造と機能とを具えたものといえるかもしれない。（山城祥二 1981 213-214）

祭りがもつ機能、それはコミュニティの維持・発展に欠かせないものであった。伝統的祭りが断絶しつつある現在、神事性をともなわないが新しい都市の祭りは、生きる喜び、共通体験する喜びを身体表現できる「場」としての役割を果たしてきている。一方、「群れ」ることが単なる一時的、享乐的な人の集団であることが現代社会で目立ってきている。

香山リカは『ぶちナショナリズム症候群』の中で、若者たちのニッポン主義について次のように論じている。

追いつめられた状況であればあるほど、人間はシンプルな極論に飛びつきやすい。これは、洗脳の心理的メカニズムの研究からも明らかにされている。(香山リカ 2002 46)、おそらく、ぶちナショナリズム的な発言や行動にあっさり賛同する若い世代の心の奥にも「とりあえず日本は特別だから」という思いがあるのかもしれない。(香山リカ 2002 52)

と論じ、さらに札幌のYOSAKOIソーラン祭りを例に出し、

「和」の要素をほんの少しだけ取り入れた祭りだからこそ、若者がこれだけ夢中になったのだろう(中略)そこでゆるやかな形で一度、ニッポン、ニッポン人という旗印を背負った自分を確認しさえすれば、あとは逆に自由奔放に無国籍の舞やパフォーマンスに打ち興じることができるというわけだ。(中略)“日本は特別な国なのだ”という妙な思い込みと同じような意識である。(中略)ことばにできない鬱積を抱えた若者の暴走や、行き場のない彼らのエネルギーが全体主義的な社会の形成に向かっていくのを一時的にくい止めるためには、ぶちナショナリズム的な「和」のブームや、ニッポンの要素を取り入れた祭りやイベントもしばらくは有効であろう。しかしこれは、何かのきっかけでフランス型ナショナリズムに転じていく危険性もはらんだ“賭け”でもある。」(香山リカ 2002 149-153)

香山は現代ヨーロッパにおける移民排斥と右翼台頭などと同じく、日本における戦前の全体主義につながる状況を「ぶちナショナリズム」と表し、次のようにも論じている。

一般の「祭り」であれば、それが終われば「日常」が待っている。しかし、「祭り」にしか居場所を求められない若者たちは、「日常」に着陸することはなく次の「祭り」を求めてさまよう。企業もメディアも政治家も「次のパスワード探し」に必死になる。「これがなければ次の祭りには参加できないよ」と若者に提示さえできれば、商品は売れ人気は上がるからだ。もはや中身は必要ない^(註5)

サッカー観戦などで「ニッポン チャチャチャ」を繰り返す若者たち。彼らは「群れ」てはいるがそこには自分たちの力で、行動で共同して何かを作り出すという表現行動がみられない。あくまでも受動的に提供された試合、映像に「群れ」ているだけである。一方、よさこい祭りに香山が危惧していることがあるのは確かであるが、高知よさこい祭りは63年間、町内会、商店街が寄付を募り、競演場を設定し、踊り子たちをボランティアで支えて来た1年に1度の地域をベースとした年中行事としての祭りであり、イベントして展開してきた祭りとは基本的に異なる。さらに子ども会や子どもチームなどは、異年齢集団として遊びを通して連帯性や協調性、責任感などを養い、人間関係を学ぶという特質をもち、「ニッポン チャチャチャ」という行動とは一線を画した表現活動である。

次に紹介する子ども4チームの「出場コメント」(高知新聞)の中には、「群れ」ることの特質が表現されている。

香南市こどもよさこい連合会(8回出場)

第55回=90人。「〈元気な香南っ子〉の笑顔がはじけます! 和風の心地よい曲調に、シンプルな踊りで勝負。香南市の子どもの一体感、地域のつながりの強さをご覧ください。」(2008年。初出場)

58=130人。「〈一つになろう〉をテーマに、元気な香南っ子が校区を超えて大集合。"K"を表した振り付けは地元愛の証し。

金魚風の浴衣を着た女の子たちにも注目してね」。

63=132人。小学4～6年生が香南市の元気をアピールします。始めと終わりに体全体で表現する「K」のポーズは必見。

最高の思い出を作ります！（2016年。8回目出場）

[写真5] 香南市子ども会連合会 地方車 2016年（香南市子ども会連合会提供）（巻末）

[写真6] 同 本部競演場（巻末）

高知市大津子ども会よさこいなるこ踊り子隊（30回出場）

第34回=100人。「高知市子ども会連合会から独立して初参加。体操服から待望の法被になった。法被には研修で子供たちが作ったマークが」。(1987年。初参加)

45=100人。「老人施設や体に障害を持つ子供たちの施設にも行き、踊りを披露。ニコニコマークが入った緑の法被で思い切り元気に踊り抜きます」。

50=70人。「小学生をリードし、教えるのは中高高校生。振り付け担当はチームOBのお兄さん。地域教育も兼ねた手作りチーム。踊りは静と動を表現」。(2003年。17回目出場)

58=75人。「テーマは〈あいさつ〉。小学生がメインで、学年を超えて力を合わせる喜びを感じつつ踊ります。キラキラと輝く太陽の下、成長した子どもたちの姿がまぶしい」。

63=80人。「大津小学校の児童と保護者中心のチーム。出場30周年を記念したターコイズブルーのTシャツが目印。「高知家」ならぬ「大津家」の団結力を見せます！」(2016年。30回目出場)

[写真7] 高知市大津子ども会連合会 帯屋町商店街演舞 2001年（巻末）

高知市介良子ども踊り子隊（12回出場）（1～5回までは介良（KERA）踊り子隊）

第52回=100人。高知市介良の小・中学生たちが黄色の着流しでサンバ！地方車には地元名産〈いちご〉のマーク。子どもたちの元気ぶりを見てください。(2006年。2回目出場。)

57=90人。「地元介良の小、中学生が一致団結。自ら〈挑戦〉をテーマに熱い踊りと地域のパワーを披露します。朝峰神社の「棒打ち」を取り入れた踊りは必見です」。(2010年。6回目出場)

60=90人。「介良小と介良潮見台小の子どもたちが、地域の声援を受け、力いっぱい踊り切ります。和調からジャズまで、さまざまなステップに挑戦しています」。

63=90人。介良小、介良潮見台小の児童で構成されたチーム。テーマは「挑戦」。子どもたちの元気を踊りと大きな掛け声で伝え、校区を超えた交流を楽しみます。(2016年。12回目出場)

高知市高須子ども会連合会（25回出場）

第39回=60人。「子供が9割以上のチームです。夏休みの楽しい思い出作りに元気いっぱい2日間踊ります。黄色の法被を見つけたら大きな声援と暖かい拍手を！！」。(1992年。初出場)

44=100人。「転入世帯の親子連れの参加も多く、よさこいを通じて地区の親ばくが深まっています。「高須を古里に」を

合い言葉に、子供たちの思い出作りを」。

49=100人。「とびきりの汗と笑顔がはじける。転勤族が多い地域の元気な子どもたちと父母らスタッフが「ふるさと高須」をアピール！」。(2002年。11回)

63=113人。「高須小学校の1～6年生のチーム。6年生が下級生に熱心に指導して練習してきました。踊りの合図は学校のチャイムの音！ 元気いっぱいに踊ります」。(2016年。25回目出場)

〔写真8〕高知市高須子ども会 地方車 2001年（高須子ども会提供）

これら子ども会のよさこいは、「子どもたちの連帯」、「地域教育を兼ねる」、「学年を超えて力を合わせる」、「子どもの一体感」、「地域の繋がり」、「地区の親ぼく」、「地方車、振付を自分たちで」、「正調よさこいとオリジナルを併用」、「上級生が下級生に指導」など、異年齢集団の形成、年に1度の祭りとしての活動、そして伝統継承と新しい伝統の創造である。2016年度の高知市子ども会連合会の地方車には、参加子ども全員の名前が寄せ書きされ、子どもの一体感が見える形で表現されていた。(写真4) 高知市子ども連合会のよさこい祭り参加は、子どもの表現活動の持つ意義の一つの形を示している。

今までに出場した子どもを主体としたチーム（障害者チームを含む）は、他に上町よさこい鳴子連（63回）、き・ら・り（14回）、てんてこ舞（18回）、にこにこ隊（13回）、認定こども園春野学園（14回）、竜宮の遣い（4回）などであった。そして他に、幼稚園・保育園チーム、さらには子どもを主体としたチーム、企業、クラブ、商店街、町内会チームにも乳児を含め子どもが数多く出場している。

本稿の執筆に当たっては高知市子ども会連合会事務局長加藤用子氏、香川友理子氏からの助言・資料提供をいただきました。子どもたちのよさこい鳴子踊りと、アンケートにご回答くださった地域の子どもチームの方々ともども御礼申し上げます。

〔註釈〕

1. 高知よさこい祭りにおける町内会・商店街に関する論考には次のようなものがある。

岩井正浩 2006「よさこい鳴子踊り進化論（5）：〈上町〉の地方車から」

神戸大学発達科学部研究紀要—13—2

岩井正浩 2007「よさこい鳴子踊り進化論（6）：〈帯屋町〉の地方車から」

神戸大学発達科学部研究紀要—14—2

岩井正浩 2009「よさこい鳴子踊り進化論（7）：町内会・商店街チームの展開」

神戸大学人間発達環境学研究科研究紀要—2—2

2. わらべうたに関しては次の論考がある。

岩井正浩『わらべうたその伝承と創造』 音楽之友社 1987

岩井正浩『わらべうた・遊びの魅力』 第一書房 2008

3. 高知新聞 1983年8月1日

4. 正調よさこい＝民謡《よさこい節》を後半部に挿入している武政英作作曲《よさこい鳴子踊り》を意味し、オリジナル音楽を作曲する場合、これらの曲の一部を挿入することが条件となっている。
5. 香山リカ 「「祭り」求める若者 盛り上がりで満足感」高知新聞 2005年11月13日

[文献]

- 岩井正浩 2016「子どもたちの夏：高知市南海中学校のよさこい祭り」
愛知淑徳大学論集—教育学研究科篇 第6号
- 山城祥二 1981「群れ創り学」 徳間書店
- 香山リカ 2002「ぶちナショナリズム症候群」 中央公論社
- 一番ヶ瀬康子・他 1969「子どもの生活圏」 日本放送出版協会
- 高知市子ども会連合会a 2004「創立30周年記念誌」高知市子ども会連合会
- 高知市子ども会連合会b 1989「子ども会」 高知市子ども会連合会
- 高知市子ども会連合会c 2016「平成28年度総会議案書」 高知市子ども会連合会
- 高知市子ども会連合会d 2014「市子連だより」 高知市子ども会連合会
- 高知市子ども会連合会d 2015「市子連なるこ踊り練習のお知らせ」(チラシ)
- 高知市子ども会連合会e 2015「市子連だより」 高知市子ども会連合会
- 岩井正浩 2006「これが高知のよさこいだ！」 岩田書院

[楽譜 I] よさこい鳴子踊り



写真 2 : 高知子ども会連合会「地方車」

写真 1 : 高知市子ども会連合会「福寿園」



写真 4 : 高知市子ども会連合会「名前の寄せ書き」

写真 3 : 高知市子ども会連合会「万々競演場」



写真 5 : 香南市子ども会連合会「地方車」

写真 6 : 香南市子ども会連合会「本部競演場」

写真 7 : 大津子ども会「帯屋町競演場」

写真 8 : 高須子ども会「地方車」